

東京2020 オリンピック・パラリンピックと埼玉

新型コロナウイルス感染拡大に伴い、1年延期となった「東京2020オリンピック・パラリンピック」。2021年に入った後も世界中でコロナ収束が見えない中で、無観客での競技開催や来日関係者に対する行動制限など、異例づくめの措置の下、オリンピックが7月23日から8月8日にかけて、パラリンピックが8月24日から9月5日にかけて開催された。

埼玉県内においては、オリンピックで、バスケットボール（さいたまスーパーアリーナ）、サッカー（埼玉スタジアム2002）、ゴルフ（霞ヶ関カントリー倶楽部）、射撃（陸上自衛隊朝霞訓練場）の4競技が、パラリンピックで射撃（同左）が実施された。

1. 競技の様子の振り返り

(1) 県内で開催された競技

はじめに、埼玉県内で実施された競技における、日本チームや選手の活躍を振り返ってみよう。

やはり、最大のサプライズニュースは、女子バスケットボールチームの銀メダル獲得と言えるだろう。体格に勝るベルギーとの準々決勝、試合時間終了直前での逆転3ポイントシュートは、日本中を興奮させた瞬間であった。

女子ゴルフでは稲見萌寧選手が、最終日に大きくスコアを伸ばして見事な銀メダルを獲得した。男子ゴルフの松山英樹選手は惜しい結果となったが、銅メダルをかけての7人でのプレーオフは、

オリンピック競技ならではの一場面となった。

男子サッカーの強豪スペインとの準決勝も、延長終了間際まで同点が続く死闘であった。惜敗はしたものの、試合後ピッチに座り込む選手の姿には涙をそそられた。

射撃では、日本選手の上位進出こそなかったものの、約100か国もの国が参加し、国際色豊かな競技であった。また、パラリンピックの射撃では、会場隣接の小中学校で、学校連携観戦プログラムが実施された。

(2) 県ゆかりの選手の活躍

埼玉県出身の選手では、柔道女子70キロ級の新井千鶴選手（寄居町出身）の金メダル、自転車競技（トラック）女子オムニアムの梶原悠未選手



バスケットボールの試合会場となった「さいたまスーパーアリーナ」



サッカーの試合会場となった「埼玉スタジアム2002」

埼玉県のオリンピック事前キャンプの実績

市町村	相手国	競技	人数	メダル数			
戸田市	オーストラリア	カヌー	23	1	1	0	0
新座市	ブラジル	陸上	92	2	0	0	2
富士見市	セルビア	レスリング	15	1	0	0	1
三芳町	オランダ	女子柔道	5	1	0	0	1
三郷市	ギリシャ	陸上	34	1	1	0	0
所沢市	イタリア	陸上、水泳など6競技	233	14	5	2	7
加須市	コロンビア	陸上、ウエイトリフティング、ボクシング	27	2	0	2	0
秩父市		BMXレーシング	5	2	0	1	1
深谷市	トルコ	女子バレーボール	25	0	0	0	0
9市町	8か国		459	24	7	5	12

(和光市出身)の銀メダルが、地元を歓声に包んだ。この2人をはじめ、県勢のメダル獲得者は、団体競技を含めてオリンピックで15人、パラリンピックで11人に上った。

また、埼玉県が特別強化費の助成やスポーツ科学による支援を行ってきた「彩の国2020ドリームアスリート」からは、ボクシング女子フライ級の並木月海選手(花咲徳栄高校出身)が銅メダルに、「埼玉パラドリームアスリート」からは、ボッチャの高橋和樹選手(草加市出身)と車いすバスケットボールの藤澤潔選手(さいたま市在住)が銀メダルに、車いすラグビーの倉橋香衣選手(越谷市在住)と中町俊耶選手(北本市出身)が銅メダルに輝いた。

2. 開催に向けた事前の取り組み

世界を湧かせたオリンピック・パラリンピック大会であったが、開催に至るまでには、長きにわたる事前準備があった。ここからは、埼玉県内での取組を統括した、埼玉県県民生活部 大浜厚夫スポーツ局長へのインタビューをもとに、事前準備や大会開催期間中の出来事などを紹介したい。

(1)事前キャンプ

当初の計画では、埼玉県内の19市町で、16か国の選手団が事前キャンプを行う予定であったが、各国でのコロナ感染拡大や受入れ地での練習施設の使用制限などの影響を受けて中止が相次いだ。また、計画されていた選手団との交流会や練習見学などが中止となった。



事前キャンプの練習風景

そうした中でも、9市町で8か国の受入れが実現した。中には、新座市のブラジルチーム、加須市のコロンビアチームなど、3～4年も前から交流が始まっていたキャンプもあった。選手団および受入れ市町からは一人の感染者も出さず、無事に終了できたことは何よりであった。

加えて、県内で事前キャンプを行った各国選手459人の中からは、10人の金メダリスト(7個の



川越市の公道を走る聖火ランナー（写真左）とセレブレーション（さいたま市）での点火の様子



メダル)を含めて、36人のメダリスト(24個のメダル)が誕生した。中でも、イタリアの金メダリスト2人(男子競歩20km、女子競歩20km)がゴールの直後に掲げたイタリア国旗は、2019年にキャンプ地所沢市の児童たちが応援メッセージを寄せ書きしてプレゼントしたものであり、キャンプ開催地にとって感激の場面となった。

(2)聖火リレー

多くの国民にとって、オリンピック・パラリンピックの開催国であることを肌で感じられるのが、聖火リレーである。

コロナ感染が拡大する中、オリンピックでは川口市・さいたま市で、パラリンピックでは県内全域で、公道でのリレーが中止となった。中止の決定は実施直前であったため、新たな実施イベントの決定や市町村との調整は、時間的制約から綱渡りとなったが、変更後のプログラムを無事実施することができた。

具体的には、川口市では、青木町公園での出発記念式と聖火台1号機前での記念撮影。さいたま市では、セレブレーション会場であるさいたま新都心公園内でのリレー。パラリンピックでは、朝霞中央公園陸上競技場での集火式、リレー、出立式などが実施された。多くの参加者からは、「公道を走れないことは残念であったが、参加できたことは満足」との声が聞かれた。

なお、埼玉県内38市町で行った公道リレーの実績は、日本一の長距離となった。また、長瀬ラインくんだり区間では、それまでの降雨による増水で実施が危ぶまれたが、幸いにも前日から水位が下

がって実施にこぎ着けられたというエピソードもあった。

3. 開催直前から期間中にかけての出来事

(1)無観客開催への変更

オリンピックの無観客開催が正式決定したのは7月上旬。ある程度想定されていたこととはいえ、競技開催日は目前に迫っており、県庁担当者は急な対応に追われた。

その中でも、きめ細かな対応を要したのは、ボランティアの活動内容の変更であった。もともとボランティアの主な役割は、観客の誘導・案内であったが、これまで2年にわたって行ってきた研修などの準備が実を結ばなかったことは残念であった。

しかし、無観客開催の決定後も、多くのボランティアから、何らかの形でオリンピックに関わる活動に従事したいとの意向が寄せられた。そうした声に応えるためにも、改めての活動内容や日程調整などが短期間のうちに行われた。

一方で、オリンピックの学校連携観戦プログラムはすべて中止と決定した。また、大宮ソニックシティと朝霞市立総合体育館で予定されていたパブリックビューイングも中止となった。

(2)ボランティアの活躍

実際に活動に従事したボランティアは、オリンピック・パラリンピック合わせて1,200人に上った。主な活動は、各国選手・関係者の出迎え・見送りや、会場付近の清掃活動となった。外国人選手がSNSに動画などで投稿していたとおり、ボランティアの方々の熱意溢れる歓送迎は、大きな感動をもって海

外にも広く伝えられた。

2019年のラグビー・ワールドカップのときも、終了後の世界中の反響に驚かされたが、ボランティアの真摯な行動や「おもてなし」こそが、海外から来日した選手・関係者には、日本滞在中の思い出として深く印象に残ったようだ。

埼玉県では、9月中旬にサンクスセレモニーを開催し、ボランティアの方々に感謝の意を表することとしている。今後のイベント開催の際の機運醸成にも繋がることを期待される。

4. 大会を終えて

(1) 経済活動への刺激効果

2013年の東京開催決定直後から、経済活動への刺激効果が大きいと期待された。

この点に関しては、第一に、競技会場や周辺インフラの整備・改修は、2019年までに完了したものを含め、概ね計画通りに実施された。これにより、設備、システム、建設などの一部関連業者には需要が発生した。

その一方で、第二に、大会開催前後の来客を見込んでいた宿泊、飲食、運輸、サービス、物販、観光などの幅広い業種では、3月に決定した「海外からの観客受入れ中止」や、7月に決定した「無観客開催」によって甚大な影響を受け、「当初期待したオリパラ効果は、ほぼ皆無となった」との声が各方面から聞かれた。ホテル業界からは、「一部大型ホテルでの大会関係者の滞在はあったが、無観客開催決定後のキャンセル続出が大きな痛手となった」との声が聞かれた。

(2) 今次大会のレガシー

それでは、「東京2020オリンピック・パラリンピック」は、埼玉県に何を遺産として残し、それを今後どのように活かすことが望まれるのだろうか？ 前出の大浜スポーツ局長は、これを次の3点に纏めた。

第一は、「多様性を認め、共生社会を育む」というオリンピック・パラリンピックの精神を引き継ぐことである。コロナ禍においても、オンラインを活用することで、県内各地と海外との交流を続



競技会場入口で選手のバスを出迎えるボランティアの皆さん

けることはできる。また、パラリンピックの開催は、共生社会を考えるきっかけとなった。パラスポーツの振興・支援を通じて、こうした機運を継続させていきたい。

第二は、「都市ボランティア」の活動の継続である。競技会場の外で活動する都市ボランティアの盛り上がりは、今次大会の貴重な遺産である。スポーツ大会に限らず、今後の様々な国際交流に向けても、こうした市民レベルの活動が根付くように、ボランティア活動への積極的な支援をしていきたい。

第三は、「子供たちの夢や希望を育む」ための取り組みの継続である。今回は、「選手を応援するための子供たちの作品募集」や、農業関係高校の生徒による花壇の制作などの形で大会に関わる機会が設けられた。本来であれば、学校連携観戦プログラムを多用することで、世界トップレベルのアスリート達の迫力を直接子供たちに伝える貴重な機会になるところであった。今後は、県内のプロスポーツチームの力を借りるなどして、子供たちに感動の機会を設けていきたい。



コロナ収束が見えず、開催反対論も根強い中での、異例づくめの今次大会。大会運営に携わった各方面の関係者には、それぞれ人知れずの苦労が多々あったことと思う。

各競技終了直後のメダリスト達へのインタビュー。国内外を問わず皆が皆、「このような状況下で開催にご尽力下さった関係者の皆様に感謝」と口にしていたことが、何よりもそれを物語っていた。